

鶴

彬

川柳句集

一九二四（大正十三）年（十五歳）

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

静しずかな夜口笛の消え去る淋しみしさ

マツチの棒の燃焼にも似た生命いのち

皺しわに宿る淋しい影よ母よ

秋日和砂あきびより弄もてあそんでる純な瞳

思ひ切り笑ひたくなつた我

無駄な祈りと思ひつゝ祈る心

運命を怨んで見るも浅猿あさましさ

其の儘ままに流れんことを願ふ我

日章旗ベツタリ垂れた蒸暑むしさ

いい夜先ます幾つかの命ゆがめられ

子供等の遊びへ暗影迫り来る

海鳴りが秋の心へ強く響き

表現派の様な町の屋根つゞき

悲しい遊戯を乗せて地球は廻る

外燈へ雨は光つて目がける

得意さを哀れさに見る哀れさ

滅びゆく生命いのちへ滅ぶ可べきが泣

生活へ真剣になれぬある生活

一跳ね一跳ね魚うおの最後が刻まれる

大きな収穫総てを忘れた喜び

泣く笑ふそして子等の日は終り

磯馴そなれ松(二)もう冬近い唸うなりなり

諦あきらめてか諦あきらめずか柿の葉は落

なぎ倒す風総ては大地へしがみ付

生きる死ぬ必死の儘ままを恐怖し

地球を封じ込めたやうな空

夜の幕払はれて地上の無惨なる

飯粒を戴いて拾ふ我が母

腹が減つた時だけ飯が旨い
肥臭い儘の身体のある誇り

瞬間を求めてゐる子供達

思切り笑へなく成た悲しい喜び

人生の努力に疲れた老人の額

太陽に雲と地球が染つてゐる

秋風が地球の上を嘗めて行く

鳥が枝に止まるが如き人の生命

儂ないと捨られもせぬ命なり

大きな物小さな物を踏みにじり

風船玉しかと掴めば破れます

束縛なく生きて悲哀なく消え

散る菊へ私一人だけが泣く

鉄鎖の解る日生活の恵を見せ

何時でも乾き切らない大地なり

煙突の煙の行方が知れない世

悪人の心へ夕陽強う照り

争ひを夫と思はぬ鶏を見る

柿の木に雀ふくれる朝となり

籠の鳥歌つて女工帰るなり

桃割れの瞳 何も彼も諦める

赤とんぼにも生命があります

小春日に宝達山が痩せてゐる

吹けば飛ぶ物丈風は吹き飛ばし

唯一の願ひすべてを忘れてる

諦めを知つた心へ光りさし

女ですと瞳を空へたどらせる

光明は見憎い姿を憎まない

区切られた丈は小川に押され

カサリと落葉は大地へ微か也

海鳴りが弓張り月を凄くする

鶏よ猫よ痛ましい事実なり

弱き者よより弱きを虐げる

小春日を鳥が肥をつついてる

外燈が闇の目のやうに光り

真まずまぐな小松へ風の吠え狂ひ

念仏ふみいしが忘れられます金かねの事

踏石ふみいしを欲ほがつてゐる人間にんげんら等

微笑ほほえみの刹せつ那暗さが消えてゐる

笹舟は反抗も無く流れてゐる

一滴の涙は光り受けて落ち

許されぬ罪の心へ涙する

落る葉は地へも溝みぞへも屋根へでも

銀貨ねの音耳と目とが光つてる

重たさが失せてズルズル引摺ひきずられ

停電へ蠟燭ろうそくの燈ひの有難ありがたさ

真暗まつくらな街 外燈が凍りつき

独り息子泥濘ぬかるみに転んで起きず

縮ちぢまつて女工未明の街を行く

女工達 声を合せて唄ひ出す

秋の朝荷車ひきのしろい息

裸木に雀ふくれて細く鳴き

女将じょしょうの瞳は乾き切つてゐる

世間を動かせず熱い涙なり

蹴倒けたおして階段を踏みあがり

親の命日を知つてゐる妓この瞳

沈みゆく陽に人間は皆哀れ

打ぶかつて跳返けかえされて泣いてゐる

一筋の光り淋しさの色に負け

踏台の高さ大地へ目がくらみ

ドン底に立つてる者の強さ也
 足許あしもとを忘れて星を懂あしがれる
 淋いしがる二つ静かに抱いだき合ひ
 赤蜻蛉あかとんぼ人間の上を泳いでる
 求めずして子等は与へられ
 正月を指をつてゐる子の瞳
あるだけ有丈でまだ物足らぬ日を送り
 赤とんぼ飛まぬ日太陽かげる
 運命は目をつぶつた儘まま流し
 失恋は生命いのちヘシカとしがみ付
 突き当つて水は曲つて行く
 着物が一番華やかな唾おしの子よ
 土蔵の影に育つて実を結ばず
 思ひ切り笑つたあとの空むなしさ
 真暗ちやうちんに提灯一つ見付け出し

子供等の表情を唾おしの子は追ひ
 飯事ままごとに唾おしの子つくねんとして立たち
 恵まれざる瞳ひとみ 涙が乾ほせて見え
 涙流す人笑ふ人日は暮る

註

(一) 磯や地面に傾いて生えた木。

(二) 千野かほる作詞・鳥取春陽作曲による歌。歌

詞は

あいたさ見たさに こわさを忘れ

暗い夜道をただ一人 あいに来たのに

なぜ出てあわぬ 僕の呼ぶ声わすれたか

……

というもので、大流行した。

(三) 日本髪で、十六、七歳くらいの少女の髪の結の方。髪を左右に分けて輪の結にしてふくらませるのが特徴。

(五) 石川県の能登半島の最高峰。

一九二五（大正十四年）
（十六歳）

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

暗闇に灯を探しつつ突き当り
母親の影に連れ子よ淋しさう
連子の名呼び捨てにもされず
泥沼にのた打ち廻る真劔さ
打たれてから打つ心考へる
大空へ笑ひ空しく消えて行き
第三者には労働は神聖なり
丘に立つ人の眼は雲を見詰る
時々空へのぼりたいここに
桃割れへ夕陽はしばし鋭し
一銭銅貨子供は確乎握ります
綱渡り危ない綱がたよりなり
幻影に人間の瞳は恐怖し

断崖をよち登る人落ちる人
繋ぐ手は人込の勢ひ離される
階段の上からつばが飛で来る
暗闇に顔と顔をすかし合ひ
抱合ふと指でつつく世間です
抱合つたものの涙砂に消ゆる
この大地この人の群この太陽
肉あつて血あつて抱く暖かさ
眼をつむり念仏する真つ暗さ
足許を見詰めて二人あるく也
太陽の光り人間の影うすし
芽を出した牡丹へ冬の陽の囁き
真暗な空大地まで低く垂れ
酒と舌額の皺の伸びる刹那
酒を売る店は酒を売るだけ

知り過ぎる程知つて悶えあり
 振翳す腕の先から何んか逃げ
 艶つばい事を臨検見せられる
 別世界ある気で二人毒を嘔み
 鶏を飼ひ恩給に日を送り
 五燭光亭王のながい病なり
 面白く火事を見てゐる旅心
 番傘が明るく過ぎて油の香
 幻影のほほえみに力する男
 裏長屋押潰されたやうに低い
 遠くから見ると血の色美しい
 嵐に勝つて帰た男に妻がある
 風と波の 奮闘に泣く浜の女
 悲鳴が聞えるやうで聞えない
 嫁の姿日に日につつましい

狂ひ踊る足へ疲れが纏ひつき
 夜の寒さ足を伝つてはひより
 目を閉れば物の触合ふ音のする
 暗さから出ると陽差へ目が眩み
 飛ぶ方へ止める力は引摺られ
 葉二本纏れからまる強さなり
 飯の味忘れた男の眼がくぼむ
 眼へうつる墮落の淵の美しさ
 階段からもんどり打て下へ落
 驀然に飛び行く力突きあたる
 生る者へ死は悠然と慌てない
 死んでも赤の他人よ泣ません
 死の背景生てる者が浮てゐる
 もがけばとて只一本の道で有
 泣く姿陽はさんさんと輝いた

真四角の角とれば又角が出来

一滴の涙白紙に跡をつけ

諦めてから其道を行くときめ

太陽が只一つしか見えません

第一線血みどろなのが地へ倒れ

地平線それから先は解らない

三角の尖がりを持つ力なり

舞ひ狂ふ足音に頼る生きる力

魂がふと触れ合つた或日です

真ん中を覗つて矢先に力あり

孤独の静けさ聴てさびしかり

地球が円く人達は迂ります

現実と理想に両手引つ張られ

育まれた殻を破つた力なり

沈黙の力大きな音を立て

力と力散る火花を空が呑み

凍つた朝空気を解す車夫の汗

林のやうに拳が立つてゐる

沈黙の儘迫り沈黙にて叫び

生きる音遙かに遙か飮する

桃割の妓の瞳だけ欲しいです

悲しみがゆるむと涙ほとばしり

白壁に子供のかいた絵がある

止り木をシカと掴んで鳴く小鳥

誰が死と舞踏をしましたか

元の処へ帰つて来たのに疲れる

仏像を爪んで見ると軽かつた

ドン底を踏んで初めて音がする

魂が一つに溶けない悩みです

一滴づつ雨は瓦に音を立て

流れゆく水に瞳を流した日

人が居ないと籠の鳥は唄ふ

シヨールウインド女の瞳が飛び出した

暴風と海との恋を見ましたか

水平線の上で太陽を立てた日だ

大切に抱いてゐるから黙つて居よう

生と死を車輪の力切りはなし

死の背景に生きてゐるものが浮いてゐる

太陽が輝いてゐる奇怪な朝

どれだけを舞ふたかは地球も知らず

小やかな塔を立てては毀す也こほ

淫蕩な空気の中に立つて居たい

悪魔と善魔とは並んで来る

ちよこちよこと大地を歩く鳥を見よ

ふと水平線から雲が湧いた

振返るとパツと首を引込めた

荷車ひきが荷車に追はれ

香水買に來た少女は工女ですしつじょ

2 + 2 が5である事も有るのですある

兵隊ごつこ男の子等計りですらばかり

突てゐる奴は後から又突かれ

墓石を刻む男がこわかつたはかいし

ひよこひよこと大地を歩く鳥を見よ

振り返るとたんに首を引つこめた

眼の軽く軽くなるまで嘆きたし

延び上る果敢い生が延びるもよいはかな

錢呉れと出した掌は黙つて大きい

太陽の光を真二つに割る尖端まふた せんたん

悲しさよ 水と油の恋でした

裏となり 表となりて 赤き線

剃刀の刃の冷さの上におどれ

一遍に灰になる様に死に度い

吐息と歩調を合せたり

曲つた道で 石ころを 蹴れり

ひたすらに 巡礼を 見おくる

「また会はう」はかなき 契り

佛さまと呼べど答へなし

数珠に手首を締められたり

満腹に苦しむ日を慾し

舞妓の瞳の中に住みたし

子と金と女に狂ひたし

金はなくとも首を持ちたり

この宵限りの星を恋せり

咽喉の奥にうそをためてる

鮎の眼は飯粒だけを見付たり

時計の針の影にゐる影

電柱が嘆きを緑へ呼びかける

掌の中に撒き残された種子

取出した金庫の鍵が錆て居た

一銭では不届か老巡礼の瞳

此の振ぎ一滴の涙ゐたまらず

さんらんの陽を破つたる塔の尖端

三角定規の真ん中に住める

裏となり表となりて赤き線

剃刀の刃の冷たさの上に躍れ

白衣など嫌だ私は生きてゐる

恋愛と胃病と神経衰弱だ

真赤な真赤な血の落書き

刃の裏にくつついて冷笑

風船玉を売つとる男

蝉鳴くは夏のおのれの肯定か

人形の瞳の閉ぢる時ありや

にこやかな朝の心に従はん

毒劔をひそめて蜂は花を訪ふ

註

(一) 当時の左翼取り締まりのために、警察官などが、家屋、集会所などに予告なく立ち入り検査をすること。

(二) 心中。

(三) 人力車牽き。

(四) 西洋中世末から近世にかけて、骸骨があらゆる人々を相手として踊る図像がヨーロッパ各地に流行した。ホルバインの木版画が有名。

◆ 『百萬石』 五十四号

巡礼の唄華やかな人生なり

◆ 『北国新聞』 夕刊 「北国柳壇」

茲宇宙の果よと星の云得ざる

鉄筋の 固さよ死んだ儘なりき

恋人をしめ殺したく抱すくめ

脱れたが抱いた物の色に染み

日曆の桃色の日に死にました

地を嘸まん夜の海々の白き歯よ

註

(一) 日曜日。

◆ 『影像』 十一号 (創刊周年記念号)

どかと座せば椅子そのものもひた走る

凝視の尖端に幸福を漂はす

伏す針の鋭き色をひそめ得ず

ひとときを積木の家の中に居る

可憐なる母は私を生みました

レットルを信じ街々の舞踏する

人なれば白黒の織物肯定す

偶然と日本の国に生れ出で

神々は赤き部屋ぬちに死ねり

死の底に髑髏の破片もなかりけり

電柱より蝉鳴くところ無くなりし

大の字になつて明日へ送られる

死の使者よ地上の酒を召し上れ

星降れば古き観念の屋根がある

磁石なく枯野の髑髏に教へらる

手をつなぐものなく縦列さへし得ず

鉛筆のあと芯の幾倍ぞ

地を嘯まむ夜の海海の白き齒よ

五と五とは十だと書いて死にました

飢え果て、悲しむ力失せにけり

警鐘の赤き響に地のゆるぎ

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

釈迦と耶蘇の合掌さも似たり

死と生と衝て詩が湧く生が咲

時を追ひ立て煽風器はめぐる

註

(一) 部屋の内部。「ぬち」は「のうち」の省略。

◆ 『氷原』十六号

薄桃色の花の呼吸の乱れたり

びたと閉づ扉に鍵のある哀れ

性慾といふ細い掛橋だ

大地迄もんどり打つて貴族の死

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

蟋蟀とはさみ虫とがふと出会

甲虫の首の細さを知り得まい

千万年菊の花春の陽を知らず

殿堂に神は今日しも留守なりき

救はれてそれ神仏の意識なし

輪を描く願ねがひを「幸福しあわせ」逃失にげうせる

散る時に嘆く力も失せにけり

散るべきを散らすが秋の心也

仏像の虚栄は人の虚栄なる

芯折れた鉛筆生せいを秘めてゐる

蒼穹そうきゆうと蔵との空間つらなれり

秘めたるはただ限りある沈黙

セカンドの刻みの隙すきに足を入れ

暴風と海との恋を見ましたか

伏す針の鋭き色をひそめ得ず

一九二六（昭和元年）
（十七歳）

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

旅人へ吹雪に消えた里程標

雪片の土に吸はるる音をきく

福村信正兄に

泥濘ぬかるみはあなたの涙血と汗と

一滴の涙と一粒の白砂と

◆ 『影像』一十五号

唾おと話せば原始的になる

晴れ渡る其の日燕よ旅に立ち

崖見下ろす王の頭上を白き雲

恋人の微笑に髑髏どくろの表情が

運命は四十八手しじゅうはつてを使ひ分け

旅人と吹雪と里程標の先

新年試吟

純心の赤子二歳に老ひにけり

◆ 『氷原』十七号

的を射るその矢よ的と共に死す

仏像はあはれ虚栄を強いられて

警鐘も落つべき日をば知らざりき

先に立つ羽を信じ群れて逃ぐ

鳥籠とらの空間と蒼穹そうきゅうの奥の奥

蒼穹そうきゅうの色を信ずるのみでよし

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

むなしやな音の行方を見失ひ

フィルムが尽れば白き幕に成

残紅やせちゆうの瘡蝶やせちゆう最後までおどる

経文へ老僧水洩みずばなぼとりぼとり

枯枝に昼の月が死んでる風景

セコンドの刻み数ふる声ありき

流る水一つの哲理を持たざりき

寒竹の春には枯木ばかりなる

電線の燕こしらへ物のよな

股引ももひきに小便をする技巧あり

生殖器切り捨度たき日もありき

仏像を木切きぎれと思つて食つた鼠

花の咲く頃気きちが狂ひにした運命さだめ

猫の眼は遂に闇をば知しちず果はつ

岬晴れて春の渚のひろびろと

電線に唸うなり伝へてあらし過ぐ

王冠の宝石と幾万の血の色と

ふれもせで別べつれし恋を忍ぶ春

合掌をさせて棺へと封じ込み

童貞にあれば少女の笑えみぞよき

影を踏む通りに影も影を踏み

便所から出て来た孔雀のよな女

枯れ果た様な牡丹ぼたんに芽の微笑

命つぐ呼吸に命刻まるる

註

(一) 与謝野晶子の「柔肌の熱き血潮に触れもみ

で寂しからずや道を説く君」を踏まえた句か。

◆ 「氷原」 十八号

枯れ枝に昼の月の死んでゐる風景

真理にかびの若芽が生えて来る

バット(二)のけむりに幻想の魚が泳ぐ

鐘の音のひろぐる波は胸に寄す

仏像を木にして囓かじる鼠なり

猫の眼はつひに闇をば知らで果て

避雷針のねらふ大宇宙の一点

唇と唇、電気の味と知らず酔ふ

海鳴りが床の下から背へひびく

迷宮の罪にふれて神を言ひ

病葉わくらばの中にみじめな花の顔

過去の背中に運命が笑つた

註

(一) タバコの「ゴールデンバット」のことで、
九〇六（明治三九）年に発売が開始された、最
も安価なタバコだった。

◆『影像』十六号

星空へキリストの眼と望遠鏡

凋しぼむべきさだめに張り切つたパラノル

五本の指は宿命論者だ

円周を早く廻つて一等だ死だ

去勢してさあ革命を言ひたまへ

◆『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

泥に住むみみずは泥はんを食はんで生

妖女じごくろは髑髏どくろの首かざりして

真理にかびの芽生えた奇蹟

棒杭と水さようなら左様なら

合掌は祈るころの姿なる

蒼空あおぞらと草あおの蒼あおさに染しむころ

蚯蚓みみず鳴く只忍びよる夕やみよ

尺八の音ぞ青竹の死の唄よ

海鳴りの音絶たえ雪女郎きぬめの衣きぬずれ

血を吸ふて血を吸て死ぬひる蛭ひるだ

玉たまの輿こしに乗るのと棺のろに乘事のりと

人死して目出度めでたく神となり玉たまふ

花くれなゐ紅、柳緑と太陽の認識

大風を飛べども燕流さるる

揺ゆるごと梢しずえの星の見えかくれ

白雲ちぎを千切つて風のその行方ゆくえ

◆ 『水原』十九号

日あたり、うつとりと寺男の俗謡
 塩鮭の口ばつくりと空を向く
 性未だリボンつけたき少女なる
 草に寝る、草の青さに染む心
 人類史の頁めくつて風窓に逃げ
 鉛筆の芯幾人の舌にふれ

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

菩提樹の蔭に積尊(一)糞たるる
 宿命の軌道を汽車は煙り吐き
 人のるぬ部屋に殻のよな外套がいとう
 春を吸ふ白砂の歓喜に腹はら這はいて
 月澄めりしみじみ語る女慾ほし
 骨を嘯む小猫の牙にふと怯おびゆ
 せせらぎの底の真底に月白き

炉火いろりびちらちらと仏説く老人

白墨はくぼくに描ける如く星流る

光明の一線の先闇をさす

そも虚空東西南北さだめなき

瞳を閉ぢて月の歩める音を聞く

琴の音ねをかたへの猫も聞き如ごとし

絃切れた響き未来へ続きけり

敵対す猫の瞳にうつる我れ

掌たなぞこにまりの空虚を握り得し

ニッケル(二)の主観ゆがんだ風景

虚無時代、恋、心底に冬眠す

註

(一) 「積尊」は釈迦のこと。釈迦はこの菩提樹の下に座して悟りを開いたといわれている。

(二) ニッケルで出来たスプーンの匙のところは凹面鏡になっていて、写った画像がゆがむことを

いう。

◆『水原』二十号

何物の二に割り出せし雄と雌

地凶描く刹那せつなも怒濤岸を囓かむ

滅無とは非我の認識なりしよな

トタン屋根さんらんとして陽の乱舞

波、闇に怒るを月に見つけられ

万年筆にインクをつめる

資本家の工場にニヒリストの煙突

寒竹の春には枯木ばかりなる

淫売婦、共同便所、死、劇場

ウインドの都腰こし巻目まきめをうばひ

掌にまりの空虚に握りしめ

棒杭と水、さやうなら、さようなら

註

(一) 女性が和服の下に腰から脚部にかけてまとう布切れ。「ゆもじ」「けだし」「おこし」ともいう。

◆『影像』十八号

花紅、柳緑と太陽の認識

宿命の軌道を汽車は煙吐きつ

音楽家がつんぽになつた

鐘の音のひろがり二つ遂に触れ

神をきく椅子に尾骨のうづきけり

光明の線の先闇を指す

絃切れた響未来へ続きけり

水流れ一(二)の哲理を持たざりき

半球の闇を地球は持ち続け

神代史男神けものと恋をする

角度を圧して樹が倒れる

七色を捨て、太陽白を秘む

レッテルに街掩はれて窒息せむ
 夜を追ひて新らしき陽の朝の舞ひ
 芽の双葉まろき虚空を抱き上げる
 三界さんがいのからくり見よや円まき窓
 神様は花火線香をもてあそび
 流星のあとを拭ぬぐへる時の手よ
 死の魚の瞳の底の青き空
 廻転の速さの極み時、空、絶ゆ
 蒼ざめたバットの殻の瞳に匂ふ
 白魚の指にコップの人生観
 新聞にうつる二十世紀の顔
 まろ玉を綴れるむすびの傑作
 猫遂に家族主義者の群に入る

註

(一) 原文は「流水れ」。今誤植として訂正。

(二) 「三界」は仏教でいう、衆生が活躍する全世界をいう。

(三) お寺の庫裏の庭に面した壁にある丸い窓。

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

病床に瞑めいすむくむく死の温ぬくみ
 夜と昼を集め無明むみょうの闇に帰す
 尿しじすれば我夜わがよくまなく尿しじの音
 理想への軌道人夫のコップ酒
 糞くその上に陽ひの七色や蠅の羽根
 尺蠖しゃくかくの歩みは時をさしはかる
 落葉おちばの一転二転無我空無
 月光の矢先をあぶる身の痛さ

註

(一) しゃくとり虫。

猫遂に家族主義者の群に入る

蒼ざめたバットの殻に神しんを閉づ

文明の私生児トツカピンニズム

あの蚯蚓みみずもく潜れど知らぬ地の深み

恋こゝろ覚て過去の背中に夢を彫る（一）

太陽の注射！ 街まち、朝の蘇生

十字架を磨き疲れた果に死す

若夫婦にわとり飼ふ鶏の一夫多妻（二）

一刷毛ひとほけ掃けば夏の絵となる

先駆者は民衆の愚に唆しげかける

一片ひときれのパンを挟んで敵対す

低き縁高き縁に圧されてゐる

哲学の本伏せて見る窓の若葉

海の蒼、空（三）の青さと相映じ

熟したる杏地あんずに割れるし朝

一枚の畳、一瞬 蠅、六羽

陽を飽あき雨の享楽を恋ふ緑

土 木の葉となり 木の葉 土なると成

枯木を拾つて焚たげば灰白し

註

（一） 刺青いれずみを彫る。

（二） メスの鶏を飼っているので、女が二人になつたということ。

（三） 若山牧水「白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まらずだよふ」を下地にした句か。

◆ 『影像』二十号

老ひぼれた地球の皺しわに人の巢

吸殻を詩園の窓の下に捨つ

人奔る金魚口あげ尾をふらん

ひねもすやわれをひたすら陽の凝視（二）

（一） 漢字では「終日」と書く。「一日中」。蕪村の「春の海終日ひねもすのたりのたりかな」という句は有名。

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

試みに数ふる中をながれ星

波、波、波、男、女、獣めく

老ぼれた地球の皺しわに人の巢よ

高屋こうおくに上れば緑むくむくと

◆ 『水原』 二十一号

性慾の仮面ぞろぞろ二十世紀の街

太陽の光りの真暗、目を食らひ

宿命の軌道を汽車は煙吐けむはきつ

夜と昼をあつめ無明の闇に帰す

大脳や、真上の星の威圧かな

尿しとすれば、我が夜くまなくひびきけり

人肉と、血の酒、卅世紀さんじゅうのカフェー

太陽の真下に蟻の唯物論

陽は放浪の旅におひばれて行く

六月の若葉の圧力の下で女と語る

水へ投る、しゅッー吸殻の無我

むくむくとした柳は夕闇を密造する

磨りつくされ墨の暗黒

童貞の間に華やかな夢を食べる

飯食くもふことに人生を浪費する

神秘てふ永遠の憑つきものに憑つかれる

海の蒼さは太陽の認識不足だ

地上が太陽の思想にかぶれた、夏

花瓶の絵、瓶の空虚をとりかこむ

資本家の令嬢の美貌に見惚みほれる

土、木の葉となり、木の葉土となり

陽の描く影のモデルになつてゐた

女と語り臆病な性慾の角をのぼす

水車に米搗うかせて居るいぢらしき童心

蜂は毒剣の使用を果してゐる

らんらんらんと太陽のどしやぶり

◆『影像』三十一号

神の手のランプと人の宇宙説

干鰯ほしいわしの無我を真白き齒かもて嚙む

陽は己のが錯覚の夜を追ひ続け

墓底の闇にこほろぎ生の唄

こゝろみに数ふる中を星流る

詩人死しペン先空をねらふ

仮死状態の夜の街、犬のたはむるゝ

高き線、低き線を圧してゐる

父母のない女、父母なき我と恋！

夫婦打ちつれ墓詣りに出る

若葉の圧力の下で女と語る

一片のパンをはさんで敵対す

子供産んでも生の神秘よ

ママ五十世紀、殺人会社、殺人デー

海の青、空の蒼さと相映じ

曇天の上にさんらんたる陽の舞踏

妻子飢ゆればストライキに入らずはい

陽を飽き雨の享樂を恋ふ緑

空間に一つの点を見つけ出し

◆『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

半球の真昼、半球の真闇まつくら

墓底の闇にこほろぎ生の唄

陽は己おのが錯覚の夜を追ひ続け

枝垂柳したれやなぎの姿となつて土が噴く

恋の夢さめ幻滅の酒を酌くむ

人生の一部を街に酔ひくづれ

空澄み渡る 腹は 減る減る

右の手に鉛筆左手に消しゴム

種子まけば種皆土へ土へ土へ

みゝずのた打てどコンクリ固い

昼顔の花をふるはず陽の熱情

松明を捨てて懐疑の群に入る

人生の糸巻しかと 手に握り

不安なく鞞と刃と抱き会ふて

◆ 『影像』三十四号

釈尊の手をマルクスはかけめぐり

落る実の空へ落つべき実はなきか

童貞の心の森の女神かな

白の珠をつらねし珠数の無常観

月、雲に失せしと人の小主観

秋の海、ひとりの男——海の精か

じつと見る臍のうづまき神に消ゆ

熟し落つ文明の実の種子と土

白痴の瞳、蕾手折りし快に晴れ

空を射む矢壺空しく成り果てし

濁煙の街の星なる聖者かな

さやのなき刃いつしか人を切る

妻もなく物乞ふ人の無我なれや

牛の骨、齒ブラシの柄となる因果

腹充てる群れに淫らな夢ばかり

学びやに料理法のみ教へられ

めらめらと燃ゆは焰か空間か

神様よ今日の御飯が足りませぬ

一九二七（昭和二）年（十八歳）

◆『日本川柳嘶聞』第二号

これやこの禁慾主義者の夢精かな
精虫の尾をふるさまぞめでたけれ

◆『水原』二十四号

音楽ききすますブルジョアの犬

ねぎの虚無土の創造あゝ蒼天

人つひに己れに似たる子を産めり

澄む空に雲一びらの感情が

忘らるにやすき路傍の犬の死よ

人、街にうごめく蟻となる哀れ

さんらん陽の奏曲に芽がのびる

頬に立つ冬の破片の鋭さや

冬の樹のうちに鳴る音に耳をあて

牛の背の老子にさゝやく天の川

ふんぷんと海にふる雪海となる

かくぜんと相見しこの世の猫鼠

親と子の血をもつ蚤の行衛かな

賃金どれい鞭もつ人のあくびかな

文明の街、雌雄の仮装行列ぢや

こうこつと月になり切る露一つ

時計止つたまゝの夜るひる

瞑想の聖者のひざを飢えた蟻

註

(一) 老子は牛に乗って裕々と遁世という故事。「老子騎牛」という画題もある。

◆『映像句集』

芽の双葉まろき虚空を抱き上ぐる

伏す針の鋭き色をひそめ得ず

流星のあとへ拭へる時の手よ

童貞の心の森の女神かな

陽はおのが錯覚の夜追ひ続け

墓石を刻む男がこわかつた

剃刀かみそりの刃の冷たさの上に踊れ

空は射む矢壺空しくなり果てし

恋ざめて過去の背中に夢を彫る

秋の海——一人の男——海の精か

音楽家がつんぼになつた

月雲に失せしと人の小主観

宿命の軌道を汽車は煙吐きつ

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

瞑想の聖者の膝を飢えた蟻

人街ひとまちにうごめく蟻となる哀れ

◆ 『水原』二十五号

金銀の鍵さんらんと闇を食ふ

陽を孕むクレオンとなり紙にふれ

病みの殻半身ぬけば秋澄めり

こけむせる巖の無念無想かな

不妊症の妻のかたへの卵かな

腕時計刻みとまつて人の脈

草の根の吐息にふるゝ骨の壺

哀れ金なくて解脱ふの書みを見ず

筒たけのこの苦悶むざんや固き岩

地球儀にうづ高かりし塵を吹く

うづ高き著書を残して秋に死す

灼熱の時やゝさめて鉄を觀し

波おこる一点四季の海の音

◆ 『影像』更生一号

酔ひ狂ふ世紀の齡よわい二十歳

監獄の壁にどれい史書きあまり

ペシミストただ黙々と飯を食ふ

蟻つひに象牙の塔をくつがへし

あな尊ふと聖書を売れば明日のパン

陽の冷ゆる頃に無産の世紀かな

人あふれ火星の使ひ未だ来ず

地のほろぶ今宵地上に恋ぞ満つ

恋！ ピエロ！ 機械！ どれい！ 地獄

絵ぞ！

飢え果てん聖者の脈をとる博士

一握の金ぞ不思議や脈を打つ

空気からパン経済論第一章

明日の世の古典とならん鞭、鎖

鞭うてど不死身のどれいばかりなり

相抱けるままポンペイの夫婦かな

◆ 『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

働けど食へず盗んで縛られる

文明の地下室「貞操売買所」

夜の底鎖のはしに三昧を弾く

宗教欄瞳を転ずれば求職欄

怒りける犬は鎖の限り出る

星すめどサンチカリズムの地の濁り

肺を病む女工故郷へ死に来る

踏みたるは釈迦とは知ず蟻の死よ

内閣の替る日種子をまきに梟

灼熱の時ややさめて鉄を見し

一握りサラリー不思議や脈を打

恋 ピエロ 機械！ 奴隷の地獄絵ぞ

地の滅ぶ今宵地上に恋ぞ充つ

眼の見えぬ小犬光へ這出る

哲学の本読む窓の雀の恋

土深く潜るみみずとなりけりに梟

五寸と延びず桑の芽摘つまれたり

短銃ピストルを握りカクテル見詰めたり

鍬ダコにあわやペンダコ敗まけんとす

海みに充つ野まに満つ街まちにみつ鎖

溺死者のつづく思想の激流よ

生き難がたき世紀の闇に散る火花

註

(一) syndicalisme (フランス語) 十九世紀から二十

世紀の始めに架けて、西ヨーロッパ、とりわけフランスで盛んであったラジカルな労働組合主義。

(二) 『仏説阿含正行經』には、「道を歩くときは、虫

が踏み殺されないように、つねに頭をたれて地面を見なければならぬ」という趣旨の教えがある。

◆ 『おほと里』 六号 (復活創作号)

飢と言ふ影に追れて反旗を伏す

王子おのが王者になるを疑はず

高く積む資金に迫る蟻となれ

君見ずや牛乳繰る男の掌

貧乏ふえて王様万歳!

君よ見ろ、兵器工場の職工募集

夜間の時間、舞踏会の時間——

米つくる人人、粟あわ、ひえ、食べて

◆ 『北国新聞』 夕刊「北国柳壇」

都会から帰る女工と見れば病む

高く積む資本に迫る蟻となれ

マルクスの銅像の立つ日は何時いつぞ

飢といふ影に追れて反旗を伏

太陽の黒点、軍備、資本主義

張切た糸の切れたる雄胤の尾

紙屑に残した弟の憂鬱

社会面見入る大臣と泥棒と
解剖を契約された人の呼吸いき
病室の時計は人に死を指して
生と死の境界線にたちろいで
セコンドは秒毎に身を刻む
恋風の身にしむ頃の月冴えて

一九二八（昭和三）年（十九歳）

◆『川柳人』八四号

柵の中に枷あり枷に生命あり

◆『氷原』十六号復活号

鍬だこにあはやペンだこ敗けんとなす
人遂に己れに似たる神を彫る

菜つ葉服着れば甲冑に似たるかな

文明とは何骸骨のピラミット

聖者入る深山みやまにありき「所有権」

街に住む奴隸となれば野の声す

餌まいて網張る中に飢えし群

◆『氷原』十七号

夕方の電車弁当殻のシンフォニー

文明のたそがれよ性慾の美学

高く積み危く揺るゝ資本主義かな

工場のひびきに仏像ゆらぐ

明日説けど世に容れられず夜を悩む

陽は赤み地は冷え切つて子が生れ

思索半ば飢えたる聖者街に入る

◆『北国新聞』夕刊「北国柳壇」

搾られる生活白痴の子が殖る

灼熱の群衆、鉄の門を破り

干鰯ほじいわしの如く民衆眼を貫かれ

仏像の封印切れば犬の骨

遂にストライキ踏みにじる兵隊である

ロボットをふやし全部を齧首かぐしゆする

人見ずや奴隸のミイラ舌なきを

◆『氷原』十八号

めかくしをされて阿片を与へられ

灼熱の群衆——鉄の門を破る

搾取した血に噴水の管をあて

奴隷ども集め兵器をこさへさせ

墨を磨る如き世紀の闇を見よ

重税に迫はれ漁村に魚尽きる

窓の無い獄壁を叩いて三千年

飢えにける舌——火を吐かんとして抜かれ

社長に逢へど帽ぬがなかつた失業の秋

支那出兵兵工廠に働らく支那人

バナナ食べる積尊の性慾

ストライキ陽血走つて居る

◆『水原』十九号

さなぎからこさへた肥を高く売り

全身を売つて胃の腑の死に切れず

食道を絞めて爆弾握らせる

大空に神の絵像を撤く仕掛け

◆新興川柳詩集『鳳』第拾編

高く積む資金に迫る蟻となれ

人遂に己れに似たる神を彫る

◆『川柳人』八八号

パンと妻奪るスイッチに手がとどき

肺を病む女工小作爭議の村へ

◆『川柳人』九一号

屍みなパンをくれよと手をひろげ

毒蜘蛛の網を乗つ取る蟻の群れ

血を流す歴史のあした晴れ渡る

海こえて世界の仲間手をつなぎ

大衆の手に翻へる一頁

鎚と鎌くまれてパンの山動く

プロレタリア生む陣痛に気が狂ひ

獄壁を叩きつづけて遂に破り

パンの山まもる兵士も飢えて来る

群衆のなだれ屍を超えて燃ゆ

資本論やけど飢えたる群の声

教壇の裏に金持どもの秘議

退けば飢ゆるばかりなり前へ出る

裏切りに争議捷たれず冬の風

胃を満すべく北南なる君と僕

◆ 『氷原』一十五号

腕を組む仲間に鎖ぶち切れる

兵隊をつれて坊主が牢へ来る

◆ 『川柳人』九四号

毒瓦斯が霽れて占領地の屍

仏像に供米が絶える小作争議

ひもじさに堪えず食ひ飽くやつを縊め

ブルジョアの夜会夜刈をする夜なり

勝どきをあげる屍のバリケード

搾取機をくだくハンマにしたたる血

指のない手に組合旗握りしめ

◆ 『氷原』一十六号新年号

一滴の血も搾らせるなど腕を組み

鞭のふるたびに熱して来る爆弾

横奪りをされる領土を獲つて死ぬ

銃口が叛いてどてつ腹をうち

俺達の血にいろどつた世界地図

飢迫る蟻米倉をくつがへし

軍神の像の真下の失業者

血税に昇る兵工廠の煙む

立禁の札をへし折り夜刈の灯

稼ぎ手を殺し勲賞でだますなり

一九二九（昭和四）年（二十歳）

◆ 『川柳人』 一九五号

つるはしが掘らせて奪ふやつに向き
どてつ腹割れば俺いらのものばかり
獄壁を塗るたび「死んでもあいつらが憎い」
十五日経つたら死ねと言ふ手当
血を略はいて坑しほをあがれば首を馘きり
追いこんだ飢餓の底から引つかへし
平台ひらだいを輪転機にして束たばに馘きり
捷かつことを恐れ裏切らせるダラ幹こ
絞め殺すたびに仲間の手がくまれ
つけ込んで小作の娘買ひに来る
みんな馘くび切れれば機械のサボタアジユ
今にとりかへすビルディングに追はれ
しもやけがわれて夜業の革命歌

白粉おしろいも買へぬくらしに叛そむき出し

昼業と夜業夫婦きりはなし

重役の賞与になつた深夜業

圧死せる奴隸のうらみ子に続き

俺達の手でこしらへた物ばかり

虐使した揚句あげくに病めば首きを馘きり

虐「殺の」血汐ちしほに鎖腐りかけ

搾取した血へど吐かせばぶつ倒れ

たこのある手と手が握る闇の中

註

(一) 墮落した労働組合の幹部。

◆ 『川柳人』 一九六号

さあみんなかへせとゼネラルストライキ
銃口に立つ大衆の中の父
病んでゐる子を殺しても裏切れず

淫売も出来ず鹹きられた老女工

月経が狂つてしまふ深夜業

恋をした罰で工場を叩き出し

元旦の休みひもじい立ン坊(二)

註

(一) (1)明治から昭和の初期にかけて、坂道の下など立っていて、車の後押しなどをして駄賃をもらうもの。

(2)街娼。

かまきりの斧をみくびる蟻の群

一人絞め殺せば十人が「ひもじい」

飢えさせておいて盗みの陥おとし穴

全集全集幾百万の羊の死

◆『川柳人』一九七号

三月のうらみに涸かれた乳をのみ

法難のたびに意識が鍛きたへられ

しもやけのクリーム買つて飯を抜き

大臣の予算霜夜の深夜業

君が追まれても組合がふえると故郷のレポ

バツト、買ふ金を救援袋へ入れる

肺を病む乳房にプロレタリアの子

仇あだに着す縮緬ちりめん織つて散るいのち

青春を買ふ紡績の募集員

◆『川柳人』一九八号

千円の自動車社長の子のおもちゃ

いつしかに鉄の流れとなるメーデー

一人の犠牲にみんな立ちあがり

惨敗の血にいろどつた組合旗

搾取した金を貰ふてゐるダラ幹

くたばれとばかり操業短縮化

自動車で錦紗で貧民街視察

待合^(二)で大衆を売る奴は無事

註

(一) 待合茶屋。

◆ 『新川柳大観——昭和明治大正』

ポンチ画^(ホ)になつてブルジョア残される

註

(一) イギリスの諷刺漫画雑誌「パンチ (Punch)」に掲載されているような諷刺漫画。

◆ 『川柳人』二〇〇号

食堂があつても食へぬ失業者

獄窓に微笑んで聞くメーデー歌

持久戦次ぎ次ぎ工場の烟がやみ

二本きりしかない指先の要求書

歌舞伎座の前をあぶれた人の群

ハンマーの音と革命歌に育ち

神殿の地代をとりに来る地主

大衆の手が打ち鳴らす暁の鐘

◆ 『川柳人』二〇一号

団結の果てに俺いらの春の花

プロ吉やアヂ太の漫画楽しむ児

検束をしても亦組む腕と腕

ダラ幹が争議を売れば騰^あがる株

◆ 『川柳人』二〇三号

マクドナルドになつても失業が増へる

緊張をうらむ土木課の人夫

大衆の怒濤死刑をのり越える

猥談^{わいだん}が不平に変わる職場裏

勇敢にスパイいぢめる母となり

◆ 『影像』九月号

三月のうらみに枯れた俺らの恋！

◆『川柳人』二〇四号

弾圧の斧がとどかぬ地下組織

ダラ幹になつてスパイに敬うやまわれ

出征のあとに食へない老夫婦

◆『川柳人』二〇五号

鬱勃とダイナマイトがもっ使用、

今日も亦あぶれか野宿雨に明け

沈没の老朽船に迫る闇

生きるため葬儀会社のストライキ

◆『川柳人』二〇六号

寿命だと言つて手当をくれぬなり

搾取機の煙もくもく怒るやう

資本家の組合法に畏かしこまり

ゼネストのレポ二機械もサボリ出し

註

(二) 「ゼネラル・ストライキ」の略。

一九三〇（昭和五）年（二十一歳）

◆『戦旗』（発禁）

アゴヒモをピケに頼んで「労農党」

猥談わいだんが不平にかはる職場裏

三・一五(二)うらみにか涸れた乳をのみ

三本きりしかない指先の要求書

勲章やレールで膨れたドテツ腹

註

(一) 一九二八（昭和三）年三月一五日、田中義一

内閣が日本共産党などの関係者千数百名を、治安維持法違反の容疑で一斉検挙した事件。

◆『川柳人』二〇九号

パンの平等を戦ひとらう俺らは怒濤となら

う

立禁の札を俺ら方でぶつ立ててべいよ

職を与へるとデモになる生命を賭けたアヂ

ビラ

深川によどむ煙は俺達の血あぶらと脂の噴火だ

◆発行『川柳入』二一二号

ゼネストだ花が咲かうが咲くまいがよ

団結へ賭けろどうせ食へない生命いのちじゃねえ

か

メーカーよ居ないあいつの分までうたはう

◆『川柳人』二二四号

明日の米代と知りながら買うモップルの団

扇よ

淫売と失業とストライキより記事が無い

淫売がモテ余すデモごっこデモごっこ

淫売をふやして淫売検挙だつてさ

手と足を大陸におき凱旋(二)し

主人なき誉ほまれの家にくもが巢ねを

註

(二) 同趣向の句に

手と足をもいだ丸太にしてかへし
がある。

一九三〇～一九三三（昭和五～八）年

（二十一～二十四歳）

◆「年月日不明」

復活のつもりで入れる火消壺

解剖の胡蝶の翅はねに散る花粉

いずれ死ぬ身を壁に寄せかける

鉄骨の伸びる打鉦だびょうの遠ひびき

恩給のつく頃部長の粉煙草

一九三四（昭和九）年（二十五歳）

◆『川柳人』二五五号

弾丸の来ぬところで

○○の

詩が出来た

×

ヘーゲルの弁証法を

逆さにして

網窓(二)の春！ 秋！

×

目かくしされて

書かされてしまふ

○転向○書

×

地下にくぐつて

春へ、春への

導火線とならう

×

欠食の胃袋が

手をつなげとけしかける！

註

(一) 監獄の窓に網がはってあることから、監獄をさす。

◆『川柳人』二五六号

1

本投げ出す

網窓の外の

鳥影

2

種たねももみ

喰べつくした

春の田の雪

3

花の東京の亀戸よ

娘つこは

年貢うらめしの鼠泣きよ

4

朝の霜柱ふんで

しもやけの耳で

あぶれきいてくる

5

踏みにじられた芝よ

春を団結の歌で

うづめろ！

◆ 『川柳人』二五七号

×

しなびた胃袋にやらう

鬼征伐の

キビ団子！

×

かまきりの

斧をぶんどる

蟻しかばねの屍

×

工場へ！ 学校へ！

わかれて行けといふ

道だ！

×

杭うちのどひゞきよ

あゝ、うづく

お腹なかの坊や

×

坊やは

乳呑みたりない

始業の汽笛よ

◆ 『川柳人』二五八号

×

血を咯げば

これだけ食つたら

死ね！ といふ手当

×

欠食のニュースを

黙殺して

過剰米千万石

◆ 『川柳人』二五九号

×

さくら音頭で

安い蚕の

桑つんでゐる

×

飢餓とは知らず

胎内の闇に

生れる日を待つてゐる

×

農村予算が

軍艦に化けて

飼猫までたべる冬籠り

◆ 『川柳人』二六〇号

東京解剖風景

・銀座

銀行の錠戸よろいどかたく

舗道の乞食の

シャツ（二）ポはシケだ

・本所

世界一安い賃銀で

凶作の故郷くへ

組む為替！

・深川

奴隷の街の電柱は

春のアヂビラの

レポーター

・亀戸

搾取器へ――

村落二八（二）の春を

吸ふてゐる

・玉の井

ストライキ――

鹹くび――飢え――

そして売春労働さ！

註

（一） 帽子のこと。物乞いのために路上に置いた帽子に一銭のお金も入っていない状態。

（二） 十六歳。貧しい農村で、十六歳になった娘が都会での仕事を探しに出て行くことを言うか。

◆ 『りうじん街』 第一巻第六号

国境になるとは知らぬ河の水

繭まゆの値の安さも言ふて村の朝

さびしくも男ぎらひの薄化粧

跳させておいて鱗を削ぐ手際

口笛を吹いて出前は交叉点

風船屋危機一髪で息を取め

◆『川柳人』二六二号

大砲は

ピアノに化け込んで出る

製鋼の門

×

浚てう「渫」船の鎖を

ぶつた切らうといふ

激流！

×

小名木川！

どんより動かぬ川づらに

火を待つ石油よ

×

埋め立てた

土工を追つぱらつて

地主のでつかい杭

×

真つ昼間！

煙突おつ立て、

合法的な血ぶくれ

姉妹つぎつぎに売られ飢餓日本！

◆『詩精神』第一卷第七号

☆捨て売りの

いのち織り込んで

人絹じんけんのダンピング

☆ラッコ毛皮で

ひもじい人籠りを

見に来やがる

☆姉妹

つぎつぎに売つて

不作！

☆没落の足どりで

ダンスホールの

階段を下りる

☆外の光りに飢えて

冷蔵庫の

馬鈴薯の芽は枯れた

☆もう一度咲かねば出られぬ

網窓の花

☆綿ほこりで腐つた胸に

レールは村へ――

ひた走る

註

(一) 天然の絹糸ににせた人造の織物用纖維。

◆ 『詩精神』 第一卷第八号

花つけた稲へ

増水の閘門こうもんあけつ放す

ダム！

×

疑獄はらんだ堤をどて

今こそ噛み破る

怒濤の牙

×

石ころ原が美田となるまで

情け深い

地主さん

×

家のない

泥海の村へ

移民釣りに来る

×

借金証文

握りしめて

地主の溺死よ

×

洪水地獄をうつして

避暑に行く――

二等車の窓ガラス

×

多角形農業！

多角形にやつて来る

貧乏！

×

これしきの金に

主義！

一つ売り 二つ売り

×

工賃へらされた金箔で

仏像のおめかし

×

太陽に飢えて

つるはし

闇を掘りつづける

◆『川柳人』二六三号

血を啗いてシキをあがればくびになり

裏切に争議捷たれず秋の風

どてつ腹割れば俺いらのもものばかり

追ひ込んだ飢餓の底から引ッ返し

団結の果てに俺いらの春の花

搾取器のけむりもくもく怒るなり

深川にただよふ煙は俺たちの血とあぶらの噴

火だ

獄窓にほゝえんできくメーデー歌

◆『りうじん街』第一卷第七号

柳人塔

——自由律川柳——

網窓あけ放てば ひらいてた——つぼみよ

死ね！ 家も田もかつさらつて 濁流

飢えせまるごとく でかくなる 白銅貨の

穴

姉 妹 つぎつぎに 年貢の穴埋め

——中田めかく子へ——

金箔にまみれ 豊かでない きみの生業

工賃 へらされた金箔で 仏像のおめかし

◆『川柳人』二六四号「人絹工場」

繭の値を下げる

人絹工場へ

機織りに行く

×

ハンマアのテロにこたへる

くろがねの

肉体

×

坑の闇にたえ切れぬ

つるはしの

火花！

×

ハンマアのどひゞきにひらく

職場裏の

花よ

×

きつと踏みにじられる日をおそれる

判決の重さ

×

人絹工場じんけんめ

飢饉につけ込んで

血ぶくれに來た

×

多角形農業！

多角形で貧乏になる



『川柳人』二六六号

一九三五（昭和一〇）年（二十六歳）

◆ 『川柳人』二六七号

南葛の鼓動

やつと食ふだけの労働街に魔窟の灯よ

ひるのサイレンはあぶれた腹の底に鳴る

夜業の窓にしゃくな銀座の空明り

埋立てのむごさをひしゃげたトロツコの廢

線

火をはらむ飢えと不平の齒車よ

◆ 『詩精神』第一卷第一号

☆さくら音頭で

安い蚕の

桑つんでゐる

☆首を縊るさへ

地主の

持山である

☆温泉へ寄る

プランを立てて

水害地視察！

☆鼠泣きおぼえて

ありつく

飯よ、白い飯！

◆ 『川柳人』二六八号

涸^かれたた乳房から飢饉を吸ふてゐる

半作の稲刈らせて地主のラヂオ体操

凶作を救へぬ仏を売り残してゐる

食ふ口をへらすに飼猫から食へはじめ

一粒も穫れぬに年貢の五割引

◆ 『詩精神』第一卷第二号

労働街風景

瓦斯タンク！ 不平あつめてもりあがり

明日の火をはらむ石炭がうづ高い

ベルトさへ我慢が切れた能率デー

生命捨て売りに出て今日もあぶれ

焼き殺されまい疲れへ役気立つて飛ぶ焼餅

「飯」

首餓りの噂不安な飯の味

飯櫃の底にばつたり突きあたる

貧しさを知らず子供の喰ひ盛り

「絃」

歓楽の唄の中間に絃がきれ

鳴り終へぬ絃のふるへに次の撥

張り替えが利かぬ生命の絃が鳴り

「火」

革命の鏡だ資本主義の火事だ

◆句集黎明

孫までも搾る地主の大福帖

ふるさとは病ひと一しよに帰るところ

地下へもぐつて春へ春への導火線

足をもぐ機械だ手当もきめてある

◆『川柳人』二六九号
レ、ミゼラブル

鉋毒も食はねばならね坑のひるめし

火達磨にして殺される石油工

話にならぬ日給で吸はされる綿ほこり

鉄あびて死ねば代りを募集する

売物になる娘のきれいさを羨やまれ

暁の曲譜を組んで闇にゐる

ふるさとの飢謹年期がまたかさみ

生き仏凡夫とおなじ臍をもち

団結の果てに俺いらの春の花

奪はれた田をとりかへしに来て射殺され

フツ酸で殺してやらうといふ採用書

銃剣で奪つた美田の移民村

戯句ざれく

うた、ねは弁証法を屋根に葺き

◆『詩精神』第一卷第三号

組合旗

救済を待ち切れぬ手の組合旗

ひえ弁当(二)の中に地主の餓鬼の白いめし

凶作の村から村へ娘買ひ

一粒もとれぬに年貢五割引！

ふるさとは病ひと一しよにかえるとこ

註

(一) イネ科の一年草。古来、救荒作物として栽培

された。かろうじて「ひえ」しか食べられない
貧農と、白い米を食べることの出来る地主との
対比。

◆『川柳人』二七一号

五月の歌

十月の嵐をはらむメーデー歌

武装のアゴヒモ(二)は葬列のやうに歌がない

デモよりも多いアゴヒモに殺氣立つ旗の槍

不参加の職場職場へひゞく歌

工場街へ！ 銀座へ！ デモの右、左り

生きたま、落ちた墓穴の呪声のろいこえ

赫灼かくしゃくの火となるときを待つ鉄よ

逆流に必死と堤を守る芝

「腕」

明日に待つ生活しなびた腕をなで

生活苦しなびた腕にのしかゝり
腕組みをといて生活へぶつつかり
二の腕にほつた恋しい名がしなび
食ひ込んだ捕縄にそむく力こぶ

「春の句」

墓穴の底にもえ出た春の草
春を逝く子に物足らぬ母の腕
牧場へもえ出て喰はれる春の草
冬眠の蛙へせまる春の鎌
真理を紙にうつして活字の磨滅

「車」

車輪車輪五寸はなれて咲くすみれ
梶棒を握り疲れて伸びぬ指

「声」

良心を楽屋においたステージの声

密林を恋ふ鉄柵(二)の咆哮ほうこう

「稲」

地主にやるものがない半作の稲
冬越しが出来ぬ吐息といきにくもる鎌
みのらぬ稲を自転車で見にきやがる

註

- (一) 帽子を被り、あごひもを首にかけ、警備をする警官のこと。
(二) 動物園の鉄柵の中で、密林を恋しがっている虎とかライオンなどの猛獣のこと。

◆ 『りうじん街』第二巻第五号

「興奮」

銃殺と云ふ宣告にかわく咽喉

「色」

一鉢の土がもつてた花の色

「鮎」

好きだつた鮎に位牌はたゞ黙し

「雄図」

はち切れる雄図を乗せて移民船

◆『詩精神』第一巻第六号

五月抄

縛られた呂律ろれつのまゝに燃える歌

これからも不平言ふたと表彰状

働けばうづいてならぬ……のあと

土工一人一人枕木となつてのびるレール

スカップが廻せば歯車の不機嫌な

◆『文学評論』第二巻第八号

もがれた片腕

腕をもぐ機械だ！ 手当もきめてある

血みどろのうらみをつかむもがれた腕の指

スカップがふえた工場のすすけむり

裏切りの甲斐なく病気の妻が死に

血へど咯はくまでの模範女工であつた

はねられた献金だけを飢えてゐる

「職工入ルベカラズ！」重役の糞たれるとこ

息づまる煙りの下の結核デー

ヨロケ(二)が待つてる勤続の表彰状

註

(一) 珪肺の俗称。珪肺は珪酸を含む細かい粉が肺に吸入されることよつて起こる病氣。進行すると呼吸困難、肺氣腫、結核などを起こす。

◆『川柳人』（改題準備号）二七三三号

本工になる人からみな鹹しられ

血を吸ふたまゝのベルトで安全デー

高樓の唄に奴隷は寝つかれず

権現ごんげんをまつる麓ふもとの村々のケガチ(ママ)

地主になるのぞみの果ての骨となり

次ぎ次ぎ標的になる移民の募集札

花嫁の写真を抱いて移民の死

◆『文学評論』第一卷第十一号

玉の井(二)に模範女工のなれの果て

売り値のよい娘のきれいさを羨うらやまれてる

米蔵へ続くレールで売られて行つた

生き埋めになる坑しきを降りてく朝の唄

ふるさとは飢饉年きんねん期がまたかさみ

フジヤマとサクラの国の失業者

註

- (一) 戦前から一九五八(昭和三三)年の売春防止法施行まで、旧東京市向島区寺島町に存在した私娼街で。永井荷風の小説『東綺譚』、滝田ゆうの漫画『寺島町奇譚』の舞台。

一九三六（昭和十一年）（二十七歳）

◆『蒼空』第一号

みな肺で死ぬる女工の募集札

とり立てにくる朝となつて仏壇の身代金

空家がありあまるといふのにベンチベンチ

の野宿

けふのよき日の旗が立つてあぶれてしまふ

ゴミ箱あさらせるため産みつけやがつた神

様の畜生

ざん塚で読む妹を売る手紙

修身にない孝行で淫売婦

もう売るものがなく組合旗だけ残り

貞操と今とり換えた紙幣の色

◆『川柳と自由』第五号

納米にされる小作の子と生れ

さ

恋すればクビになる掟で搾りつくされる若

裏切りをしろと病氣の子の寝顔

富士がそびえる空を低賃銀のすす煙り

仲間を殺す弾丸をこさへる徹夜、徹夜

泥棒を選べと推せん状が来る

◆『蒼空』第四号

村々の月は夜刈りの味方なり

暁をいだいて闇にゐる薔

枯れ芝よ！ 団結をして春を待つ

吸ひに行く——姉を殺した綿くずを

貞操を為替に組んでふるさとへ

◆『詩人』四月号

村中の娘売られて女学校へゆける地主のお

嬢さん

お嫁にゆく晴衣こさへるのに胸くさらせて
ある

ふるさとへ血へど吐きに帰る晴衣となりま
した

あかぎれの血を織り込んだ人絹じんけんの捨売り

◆ 『蒼空』第五号火箭集

とらわれに腐つた胸の番号札

差入れが絶え状勢をはかるなり

判決が近づく朝々を咲く網窓の花

転向をしろと性慾がうづく春

深夜の独房と思想をゆすぶる工廠の深夜業

転向を拒んで妻に裏切られ

◆ 『川柳と自由』第七号

強盗の一の子分は×××

売られずにゐるは地主じぬしの阿魔あまばかり

神代かみよから連綿として飢ゑてゐる

失業の眼にスカップの募集札

洗濯をしろと呉れやがつた公休日

くひしばるたびうづいてくる飢ゑの牙

蓄妾ちくさいをやめず工場を整理する

血に飢ゑた番犬へ飼主ふとつてゐる

これで失業になる×××が出来上り

失業者をふやしておいて片づける××さ

◆ 『蒼空』第六号

熔鉱炉よネオンよ血走る大東京の空

働かぬ獣どもさかりに來て銀座の夜ひらく

金庫を守る鎧戸よろいどに閉め出されてゐる乞食

結核菌と脂じふんの渦(こ)にマネキン嬢

こんなでつかいダイヤ掘つて貧しいアフリ

カの仲間達

ポケットのホルモン剤と紙幣の束

貞操の玩具をあさる二足獣

日給で半分食へる献立表

銀座裏ヅケ^(一)を争ふ人と犬

註

- (一) 脂粉。「べに」と「おしろい」。化粧のこと。
- (二) 残飯。

◆ 『蒼空』第七号

待合で徹夜議会で眠るなり

労働ボス吼^ほえてファッショ拍手する

「産聯^{さんれん}」のアジビラが飛ぶ衆議院

大臣へ飽いた妾^{めかけ}を呉れるブル^(一)

神国の富士飢餓日本の三原山

生き埋めよ！ 豚より安い涙金

註

(一) ブルジョア。

◆ 『蒼空』第八号

グラインダーの蒼い火花に徹夜続きのあば

ら骨

もうけるのに一日十四時間でまだ足らず

鉄ほてり真夏の夜の目がくらみ

「カネオクレ」最後のものを売^(一)るばかり

初恋を残して村を売り出され

註

- (一) 娘のこと。貧しい農家では、困窮すると娘を売りに出した。

◆ 『蒼空』第九号

孔雀^{くじやく}！ けんらんと尾をひろげれば生殖器

王様のやうに働かぬ孔雀で美しい

遊び飽^あき食^あひ飽^あきさかり、飽^あく孔雀^{くじやく}

蟻の卵のうまさを孔雀くじやく盗りおぼえ

踏み殺し切れぬ蟻に孔雀くじやくは気が狂ひ

着飾つた羽毛のあひへもぐる蟻

生き残る蟻の凱歌に孔雀くじやくの死

飯米に盗んだ米を盗まれる

◆『蒼空』第十号

太陽は女神よ地上の女奴隷たち

監督に処女を捧げて歩ぶを増され(二)

売春婦あぶれた夜は飢えと寝る

休めない月経痛で不妊症

日給二十五銭つつ青春の呪ひ織り込んでや

る

嫁入りの晴衣こさへて吐く血へど

地搗唄じつぎ次の時代へ残す家

奴隷ではない女らの手のヨイトマケ

インテリが疲れて女土工起ち

新居格にいいたる(二)のペンダコあわれ綱に負け

親綱をとる井上信子まだ老ひず

裏切りの夜から情痴の虫となり

蜘蛛の巣にかかつた蝶に夜が来る

煤煙の濁りを吸ふた花の色

転地すれば食へぬ煙の下で病み

子を産めぬ女にされた精勤証

註

(一) 歩合を増してもらう。

(二) 一八八八(明治二十一年)——一九五一(昭和二

六)年。読売新聞、東京朝日新聞の記者を経て

文筆家。政治的にはアナキストと云われている。

◆『蒼空』第十号

生き神のネロじとの如くにおかす初夜

神霊がのり移つたときさかるなり

神殿にダブルベッドとホルモン剤

春画ひろげたまゝ生き神様の枕元

抱き飽いた侍女弟子へめあわせる(二)

生き神といふ人間でないけものなり

「番号札」生き神様のなれの果て

註

(一) 結婚する。

◆ 『大華』第二巻第五号

半島(二)の生れでつぶし値の生き埋めとなる

内地人(二)に負けてはならぬ汗で半定歩のトロ

押す

半定歩だけ働けなまけるなどやされる

ヨボと辱しめられて怒りこみ上げる朝鮮語

となる

鉄板背負ふ若い人間起重機で曲る脊骨せぼね

母国掠め盗つた国の歴史を復習する大声

行きどころのない冬を追っぱらわれる鮮人

小屋の群れ

註

(一) 朝鮮半島。当時、朝鮮半島から強制的に日本につれてこられて、労働を強要されていた、朝鮮人がいた。

(二) 日本国内の人の意味だが、日本人に限定して使われた。

一九三七（昭和十二）年（二十八歳）

◆『蒼空』第十三号・改題準備号

春を待つ地熱に続く休火山

地熱燃え怒り地球ま春にめざめたり

春の太陽へ廻る地球の奴隷達

地球まだ老ひぼれず奴隷の春近し

解放の前夜——その闘ひに死ぬ奴隷達

太陽のベルト自由の春動く

◆『大華』十一号

シキの底ひと息ごとの肺の煤

セメントでこわばつた白い肺で血も吐けな

いのだ

鉄粉にこびりつかれて錆びる肺

もう綿くずを吸へない肺でクビになる

サナトリウムなど知らぬ長屋の結核菌

紡績のやまひまきちらしに帰るところにふ
るさがある

夜業の煤煙を吸へといふ朝夕のラヂオ体操

か

息づまる煙下の下の結核デー

タマ除けを産めよ殖やせよ勲章をやるう

この安日給で妻をもたねばクビになるばか

り

これからどうして食つてゆこうかと新婚の

夜を寝つかれず

免税になるまで生めば飢死が待ち

葬列めいた花嫁花婿の列へ手をあげるヒツ

トラー

種豚にされる独逸ドイツの女たち

ユダヤの血を絶てば狂犬の血が残るばかり

ソビエットを奪へと^{けつしよく} 缺食の子をふやし

鉍毒の泥海をダムはもりあげてゐやがった

決潰する夜のダムの真下の鉍夫村

きのうまでとかした毒泥あびせかけられ

貧しさの中の歓楽の夫婦の姿で生き埋めと

なり

救いをよぶ咽^{のど}ふさがれてしまふ硫化泥よ

泥海にふた親のまれた子がゐる子をさらわ

れた母がゐる

毒泥を呑んでつかんで悶絶の姿にされて凍

つてる

いまは仲間の死骸掘り探すシャベルとなつ

た

うらみ呑んだ仲間の死骸が幾百とゐる蒼ず

んだ毒泥の底

掘り出された屍の一つを父ちゃんと知る星
の光り

生き埋めのうらみ生き残された子にうづく

生き埋めのうらみ買い占めてやらうといふ

見舞金だつた

凶作つづきの田は鉍毒の泥の海

十年はつくれぬ田にされ飢えはじめ

◆ 「川柳人」二七五号

金の卵を産む鳥で柵に可愛がられる

柵を越せぬ翼にされ生む外ない金の卵

産卵せねばしめ殺す手で餌をあてがわれ

奴隸となる小鳥を残すはかない交尾である

重税の如く奪はれる金の卵を産み疲れ

死なないといふだけの餌でつぶされる日が

迫り

産み疲れて死んでやれ飼主めひぼしになら

う

◆『火華』二十六号

増税の春を死ねない歎願書

ゼネストに入る全線に花見客

人民に問へばゼネラルストライキ

アゴヒモをかけ増給を言へぬなり

祭政一致と言ふてゆるさぬメーデー祭

五月一日の太陽がない日本の労働者

『病欠』で来たハイキングのメーデー歌

空白の頁がつゞくメーデー史

議事堂でみたされぬ飢がむらがる観音堂

フジヤマとサクラの国の餓死ニュース

エノケンの笑ひにつゞく暗い明日

男らは貧しくひとり、花嫁映画みるばかり

「ワリビキ」へ貧しさ負ふて列ぶ顔なら

クビになる恋と知りつゝする若さ

殴られる鞭むちを軍馬は背負はされ

妾飼めかけふほど賽銭さいせんがありあまり

闇に咲く人妻米のないあした

バイブルの背皮にされる羊の死

泥棒と知れ花魁おいらんの恋やぶれ

喰くふだけのくらしに遠いダイヤの値

税金のあがつたゞけを酒の水

◆『火華』二十七号

メーデーのない日本のストライキ

要求を蹴りアゴヒモがたのみなり

歯車で噛まれた指で書く指令

翻ひるがえる時を待つてる組合ひるがえ旗

生きてゐるな解雇通知の束がくる

書

スカップが増えた工場のすゝけむり
缶詰めにする暴力団を雇ひ入れ
今からでもおそくないといふ裏切りの勧告

総検(二)にダラ幹だけがのこされる
弾圧がいやならとれといふ歩増ぶまし
くらしには足らぬ歩増ぶましで売る争議
釈放を解雇通知が待つてゐた

註

(一) 総検拳。

◆ 『川柳人』二七八号新人特輯号

正直に働く蟻を食ふけもの
蟻たべた腹のへるまで寝るいびき
蟻食ひの糞殺ふんされた蟻ばかり
蟻食ひの舌がとどかぬ地下の蟻

蟻の巣を掘る蟻食ひの爪とがれ

やがて墓穴となる蟻の巣を掘る蟻食ひ
巣に籠る蟻にたくわへ尽きてくる

たべものが尽き穴を押し出る蟻の牙
どうせ死ぬ蟻で格闘に身を賭ける

蟻食ひを噛み殺したまゝ死んだ蟻

◆ 『川柳人』二七九号

パンを追ふ群衆となつて金魚血走つてる

工夫等の汗へすぎてく避暑列車

◆ 『川柳人』二八〇号

昂奮剤を射された羽叩きでしゃもは決闘に
おくられる

稼ぎ手のをんどりを死なしてならぬめんど
りの守り札

賭けられた銀貨を知らぬしゃもの眼に格闘

の相手ばかり

決闘の血しぶきにまみれ賭けふやされた銀
貨うづ高い

遂にねをあげて斃れるしゃもにつづく妻ど
り子どりのくらし

勝鬨あげるしゃものど笛へすかさず新し
の蹴爪飛ぶ

最後の一羽がたはれて平和にかへる決闘場
しゃもの国万才とたはれた屍を縄がむしつ
てゐる

をんどりみんな骨壺となり無精卵ばかり生
むめんどり

をんどりのゐない街へ貞操捨て売りに出て
あぶれる

骨壺と売れない貞操を抱え淫売どりの狂ふ

うた

稼ぎ手を殺してならぬ千人針
銀針に刺された蝶よ散る花粉

避暑客の汗を一人で流す火夫

枕木は土工の墓標となつて延るレール

泥濘をよける気のない程疲れて帰る

泥濘の長屋へすくむ視察団

召集土産待つ子の夢を見る

◆『川柳人』二八〇号

花園の蜜をあつめて奪られる箱を与へられ

蜜箱空つぽにする手を知らず稼ぐばかりの

蜂である

蜂に蜜吸はれつくした花園洞んで散つて咲

かない

新しい花園を襲ふ働き蜂の剣の毒

襲^{おそ}ふてくる蜂の毒剣へ花園の蜂も毒の剣
蜂ら刺しちがへて死んで花園を埋めてる

◆ 『川柳人』 二八一号

高梁の実りへ戦車と靴の鉦^{びょう}

屍^{しかばね}のゐないニュース映画で勇ましい

出征の門標があつてがらんどうの小店

万歳とあげて行つた手を大陸へおいて来た

手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動き知るころ骨がつき

一九三八（昭和十三年）（二十九歳）

タマのあと働いたびにうづき出し

-
- 澤地久枝 『鶴彬全集』（自費出版、一九九八所収。）
 - 底本には、詩・評論・手紙が掲載されているが、川柳句集のため割愛した。
 - 適宜振り仮名をつけた。
 - わかりにくい語句には註をつけた。
 - PDF化には LATEX 2_ε のタイプセットを行い、dvipdfmxを使用した。